美術振興の聖地を後世に

ＮＰＯ法人青木繁「海の幸」会 理事長　大村 智

日本美術界に多大な足跡を残した明治期の洋画家、青木繁の「その短い生涯に燃焼しつくした浪漫溢れる世界に接して画家になる動機を得た、という方が多くおられた」と聞き、私は館山市布良の小谷家を訪れました。青木繁、福田たね、坂本繁二郎、森田恒友らが滞在した小谷家の一室に佇んだとき、若き彼らの青春群像が立ち表れてくるような思いにかられたことを、昨日のことのように思い出します。この作品が生まれた場所をいつまでも保存したいという皆さんの熱意に動かされ、この家に代々住み継がれている小谷家の御了解を得て、平成 22 年にＮＰＯ法人青木繁「海の幸」会が設立され、その理事長をお引き受けしました。

東日本大震災により資金集めは一時中断を余儀なくされましたが、全国の多くの方から深い御理解と熱い御支援を賜り、無事に修復工事を終えて、このたび公開に至りました。私どもの会としての目的は達成することができ、後は強い熱意をお持ちの地元の皆さんにバトンをお渡しすることになります。青木繁「海の幸」誕生の家を地域の貴重な文化遺産として、後世に残していくことを切に希望するとともに、多くの皆様に、日本近代洋画の原点が芽生えた地である小谷家を訪れていただき、当時の人々に思いを馳せ、多くの感動を味わっていただけますことを、心から願っております。

（女子美術大学名誉理事長・北里大学特別栄誉教授）

青木繁「海の幸」記念館の開館に寄せて

青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会 会長　嶋田 博信

少子高齢化が進んだ館山市富崎地区（布良・相浜）の活性化を目ざし、10 年にわたる保存運動を経て、小谷家住宅が青木繁「海の幸」記念館として公開されることになりました。大村智先生をはじめとする全国の美術関係の皆様、当会の会員の皆様、行政の皆様ほかご支援をいただいた関係各位に御礼を申し上げます。全国巡回チャリティの青木繁「海の幸」オマージュ展、館山市ふるさと納税、瓦プロジェクトなどを通じて基金が集められ、今日を迎えることができ、心より安堵しております。

また、小谷家のご家族におかれましては、長年住み慣れた自宅を一般公開に提供することを英断され、物置を増改築した小さな管理棟に住まいを移していただきました。改めて感謝と敬意を表するとともに、地域住民の皆様にもさらなるご理解とご協力のほどお願いいたします。

大村先生のノーベル医学・生理学賞と文化勲章の受賞の慶びは、私たちにとっても大きな励みとなりました。小さな漁村のまちづくり活動ですが、文化財建物の保存にとどまらず、忘れ去られていた地域史の調査研究も進んできました。青木繁ら４人の若者の滞在を支え、重要文化財の絵画が描かれた漁村の様子が少しずつ明らかになり、私たち住民も驚きとともに誇りを取り戻しつつあります。

小谷家住宅の公開といっても、行政や企業が運営するのではありません。小さな市民団体の力には限界がございます。文化遺産を未来の子どもたちに手渡すためにも、全国の画家の皆様や行政の皆様には、管理運営に関して末永いご支援を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

『刻画・海の幸』への想い

彫刻家・館山美術家 顧問　船田 正廣

わが国第一号の重要文化財となった近代西洋画の『海の幸』は、私のみならず多くの美術家に影響を与えてきたといっても過言ではありません。美術学校で、人体美学や美術解剖学を学んだ青年が、布良の漁師たちの労働する姿や、航海安全豊漁祈願の祭礼で荒々しく担ぎゆかれる神輿を見て感動し、人間として平等に躍動する肉体美に憧憬を抱いたのではないでしょうか。男たちの歩く先には大きな夢が満ち、目指す先は永遠にあるという確信にあふれた大ロマンを感じます。

信州上田に生まれ、房州館山で美術教師をしてきた私は、還暦を迎えた時、改めて『海の幸』と向き合う時間をもちました。青木繁は、彫刻家以上に彫刻的な絵を描ける画家です。彼と同等の衝撃的体験を共有することは出来ないものか、必ずこの絵から彫刻が生まれるはずだと確信し、絵画『海の幸』と同寸大で粘土によるレリーフ（浮き彫り）に取りかかりました。彼の描いた骨組みや筋肉表現にたどりつけないまま、３年目に彫塑のヘラを置きました。完成した写真に 2004. 7. 31 と日付があるのを見て、私は身震いがしました。青木繁が『海の幸』を描いてから、ちょうど百年目だったのです。

このたび、10 年間親交を温めてきた河正雄先生が、私の『刻画・海の幸』をブロンズにして寄贈されることになりました。画壇の聖地として小谷家住宅が蘇ると同時に、私の作品が置かれ、百年後の未来に手渡されるということは、この上なく光栄な喜びと感謝しています。

美術友好交流の架け橋に

韓国光州市立美術館 名誉館長　河（ハ） 正雄（ジョンウン）

在日韓国人の私は画家を志しながら家庭の事情で断念しましたが、事業に成功してからは在日画家のすぐれた作品を蒐集し、韓国の美術館に１万点以上を寄贈してきました。1970 年代後半、私は全和凰(チョン･ファファン)の画集制作にあたり美術評論をお願いするため、ブリヂストン美術館の嘉門安雄館長を訪ねたことがあり、そこではじめて、青木繁の『海の幸』に出会いました。生命力あふれる躍動感と、汗と海のにおいが充満していました。さらに労働の喜びが表現され、いたく感動したものです。

2005 年に旧友が住む館山を訪問したとき、小谷家に案内され、ここで『海の幸』が描かれたと知り、かつての感動が蘇りました。小谷家住宅の保存に賛同し、保存会設立の発起人に名を連ねました。

美術を愛し、美術を通して、幸福と平和を願う想いは多くの人が共有する世界です。戦後 70 年・日韓国交正常化 50 周年の節目に出会いの縁を叶え、船田正廣先生が情熱をこめた『刻画・海の幸』をブロンズにすることが、絆を結び、共に生きる最良の道だと心が決まりました。日韓の美術友好交流の架け橋として、館山の小谷家住宅、福岡県久留米の青木繁旧居、そして韓国の光州市立美術館分館河正雄美術館･霊巌郡立河正雄美術館･ソウル金熙秀記念秀林アートセンターの５ヶ所に設置されます。

普遍の価値をもつ『刻画・海の幸』が、連帯の意味、友情の意味、生きる意味、幸せの意味をこめて、永遠にメッセージを放ち続けることでしょう。共にこの慶事を祝し、守っていきたいと思います。

（韓国朝鮮大学校美術学名誉博士・財団法人秀林財団理事長）